【郷土史への扉】

天降川川筋直し三五〇年記念

天降川の姿 その1

history & geo park

寛文六（一六六六）年に天降川がホテル京セラ横を流れる現在の川筋に変わってから今年で三五〇年を迎えます。今回からシリーズで、天降川の川筋直しについて紹介します。

天降川とは

天降川は、鹿児島県湧水町の国見岳（標高六四八メートル）南麓に発し、霧島市を縦断する、全長約四十二・五キロで二十二の支川と四一一平方キロの流域面積を持つ、市内最大の二級河川です。

その特徴は、姶良カルデラの周辺部にあることから、

・シラス台地を削るように流れている
・高低差が大きい（滝が多い）
・※甌穴や峡谷を形成している
・湧水が多く水量が豊富である

などが挙げられます。

天降川の名の由来

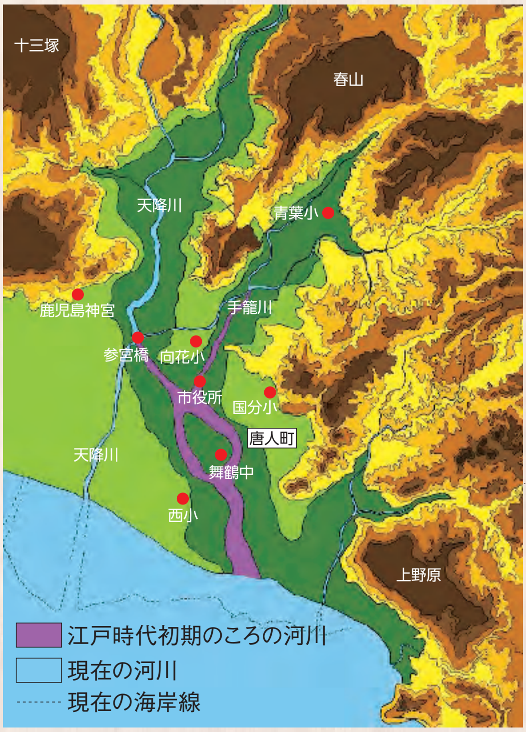
江戸時代後期に刊行した『三国名勝図会』によれば、天降川の名は『古事記・日本書紀』で登場する天照大御神の孫である瓊瓊杵尊が天下った霧島山を水源としたことに由来する、と書かれています。しかし江戸時代において天降川という名称は一般的ではなく、上流から中流域にかけては「金山川」、下流域では「大津川・広瀬川」と呼ばれていました。

天降川の名称が一般的になるのは昭和十六年のこと。当時の牧園町長が鹿児島県知事に「河川名を天降川に」と請願したことによって正式名となり、現在に至っています。

川筋直し以前の天降川

川筋直し以前の天降川は、サン・あもり近くの参宮橋から下流が国分府中の西側を大きく迂回するように国分シビックセンター方面に流れていました。そこに第一工業大学の西側から国分中央高校グランドを経由して流れていた手籠川が合流。その先は、国分平野を東西に大きく二分する川幅の広い河川となり、舞鶴中学校付近にあった中洲を囲むようにして流れ、錦江湾に至っていました。（絵図参照）

旧河川沿いの小字を調べてみると、国分府中には「流合」という地名が、霧島市民会館周辺には「川跡」という地名が残っています。これらは当時、河川と関係が深かったことを物語っています。



天降川川筋直し絵図

天降川の地形と産業

中洲を形成していた一帯（舞鶴中学校東側）に「梅木」という場所があります。ここは島津家十六代当主島津義久の家臣であった服部宗重が慶長十一（一六〇六）年にたばこを初めて栽培した場所であり、これが「花は霧島、たばこは国分…」から始まるおはら節の一節にもなりました。

一方で、梅木の対岸（国分中央六丁目の正覚寺公園付近）には「唐人町」という地名が残っています。当時は琉球や中国と交易が行われており、貿易船が錦江湾から天降川をさかのぼって当地まで来航したり、中国の商人たちが住んでいたりしたことから唐人町という地名が付きました。これは当時の天降川に貿易船が就航できる豊富な水量と十分な水深があったことを表しています。

当時の天降川は中洲があることからも分かるように複雑な流れをしていたため、大雨によって一旦増水すると暴れ川へと変貌し、住民の生活に大きな被害を及ぼしていました。

次回は、川筋直しが行われた背景について紹介します。

（文責＝鈴）

※流水で運ばれる軽石などが、川底の岩石面上を削ってつくる円形の穴。